

「お前たちは立ち帰って、生きよ」

(マタイによる福音書 21 : 28-32)

今日のたとえ話に登場する兄弟は、主人からの呼びかけに対象的な応答をします。主イエスがこのたとえ話をしている相手は祭司長や長老たちです。彼らは、自分たちは律法をよく知り、律法をよく守っている自負があったことでしょう。その彼らは、このたとえでは「弟」の方です。弟は応えました。「お父さん、承知しました。」この言葉は、「わたしは準備できています、主よ」と訳すことができます。つまり、「主よ、わたしはいつでも OK ですよ」というような自信に溢れた言葉です。たしかに、彼らは神の指示に従おうという気持ちを持っていたに違いありません。しかし、実際に人間は神の指示を、神が望むように完全に果たし得るのでしょうか。もしそんなことができるなら、人間はとっくに神に立ち帰り、この世界には平和が実現しているはずですが、それができないから、今のこの世界の現実があるのです。にも関わらず、その現実を造り出しているのが他でもない自分であることを認めることができないことこそ、人間の罪深さであり、弱さです。ですから、この「弟」は返事こそ威勢が良かったものの、実際にはそれを実行する力がないために、出かけることができませんでした。

さて、他方「兄」は、「徴税人や娼婦」と重ねられています。祭司長や長老たちのみならず、当時の世間の常識において、「律法を果たさない者」=救われない者とされ、軽蔑されていたのが徴税人であり、娼婦です。誰もが、徴税人や娼婦たちよりも、正しいのは祭司長や長老だと言うでしょう。しかし主イエスは言います。「はっきり言っておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。」なぜなら、「ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは神を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。」と主イエスが言われる通り、「悔い改めよ。天の国は近づいた」というヨハネの呼びかけを徴税人や娼婦は聴いたからです。ヨハネの言葉を受け入れた徴税人や娼婦たちは、自分たちが神に従い得ないことを自覚していたのでしょうか。それゆえ、「兄」のように、はじめは「いやです」と言って、主の道から外れていました。しかし同時に、彼らは自らの生き方に痛みを感じていたのでしょうか。その痛みゆえに、後から考え直すことができました。傷が救いの入口になる、とでも言いましょうか、自らの姿を素直に見つめることができるところに、悔い改めは起こるのです。

今日の旧約、「イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。わたしは誰の死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」という神の言葉は、祭司長や長老たちにも向けられています。自分の有り様や弱さが、その自負心によって見なくなっていた祭司長や長老たちは、「悔い改めよ」という言葉を聴いて信じることも、悔い改めることもできませんでした。しかし、誰もが招かれているのです。徴税人や娼婦たちのように、自分の過ちを勇気を持って見つめ、それを認めるとき、その過ちは恵みに会うための機会へと変えられます。「福音とは大逆転」だと言われることがあります。その通り、わたしたちが今日、主イエスに出会って考え直し、自らの過ちを認めて、自分の正義ではなく神の正義に立ち帰るなら、わたしたちのどのような過去も、これまでの歩みも、神に出会うための恵みへと変えられます。